

2011年(平成23年)1月16日(日曜日)

言

堂

新

屋

紀元二千六百年

IMPERIAL JAPAN AT ITS ZENITH: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary

消費と観光のナショナルリズム

ケネス・ルオフ著

朝日選書 1500円

わかには信じがたいが、人びとは奈良県や宮崎県などにある初代天皇の聖蹟や神社を巡拝し、異国情緒の味わえる朝鮮や満州に旅して聖地となった日清・日露の激戦地を訪れた。

こうした観光熱は、新聞・雑誌や鉄道会社、百貨店が煽り立て、中産階級に属する国民が呼応して生まれた。当時、観光が国家と天皇への忠誠心を高めると意識していたか否かは別に、結果的には、自発的にみえる国民の行動が、戦争を下支えした。そして、「消費と観光」を謳歌した帝国臣民は、2年後には「欲しがりません勝つまでは」という禁欲的なスローガンを掲げて、耐乏生活へと突入する。

人はいつも大きく強い声に引きずられ、行きたくもない場所へ運ばれる。しかし、それを国家や時代のせいだけにしていいのが、本書を読んで大いに考えさせられた。木村剛久訳。



◇Kenneth J. Ruoff＝1966年、米国生まれ。英語圏での現代天皇制研究の第一人者。邦訳書に『国民の天皇』。

SF小説の題名ではない。2600年はとうの昔に過ぎて、今年は紀元2671年である。この「紀元」は、日本書紀の編纂者が中国の曆をもとに編み出した初代神武天皇の即位年「辛酉の年」を基点としており、皇紀ともいう。西暦より660年も長く、天皇制を称揚するのに都合がいいというので明治政府が採用したが、歴史的な信憑性はまったくない。

その節目の年「紀元二千六百年」(昭和15年、西暦1940年)を迎えた日本人は、戦争のさなかでありながら、祝賀ムードに沸き立った。70代後半以上の方なら、提灯行列などの思い出があるはずだ。実現はしなかったが、東京オリンピックや万国博覧会も計画された。

本書の著者ルオフは言う、ほとんどの戦時日本論には国民が不在だ。と。たしかに、国家だけが戦争をしていたのではない。その時国民は何をしていたのか、その行動はどのような意味をもち、どのような結果をもたらしたのか。

日本人にとっては忘れない暗い時代の記憶が、膨大な資料を駆使して掘り起こされる。こ

戦争支えた観光熱

評・三浦 佑之 (古代文学研究者
立正大教授)